

方向

第一二五号 一九九一年二月一〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

世に一人のこひしき君

1991-18-31

原田 憲雄

— 中野道遥の手紙 (二) —

前回の春夢女史あて中野道遥の手紙は、一八九二年のものと推測したが、確かなことはわからない。いま紹介するものも「九月七日」とあるだけで、年は記さぬ。しかし追伸に、「此度は九州方へ渡遊いたし」という言葉があるので、『道遥遺稿』の「九州漫筆」に照らして一八九四（明治二七）年のものと決定できる。道遥二八歳、女史二二歳。この年一月一六日に道遥が急死しているから、手紙はほとんどかれの絶筆と考えうる。

其後、
清く、
りて

其後□□□□御くらし
の御事にや

のこころも
まろし
まら

なつかしき御

うはさも
海山
だつる
はる

うはさも海山へだつる
此身には

しるよしもなく御地の空を

空を

のみながめくらし申候

のみながめくらし申候

本年掃郷の折 京都

本郷御郷の折 京都

へ立寄久し振にて春児

様にも面会申上

様にも面会申上

八月の末

上京の折も御たつね

上京の折も御たつね

申上げん

上京の折も御たつね

と 思居候へども

子 守 候

海 路 へ 申 上 候

海路にて帰京致し候

為に

其 意 を 得 ず 残 念

其意を得ず 残念

之至(に?)

御 座 候

御座候

御 身 は 御 上 京 の 御 順 序

御身は御上京の御順序

たはこび

かげながら

世に一人の

何

とぞ何とぞ

早く

何

此心

御察し給はり度候

御面会いたし度

当分は東京にて

すまひ候考

候哉

御なつかしく

世に一人の

こひしき君

とぞ何とぞ

御面会いたし度

此心御察し給はり度候

当分は東京にて

すまひ候考

みづかきおらふはんまさらぶすぢ

に御座候得は

御心にさはらすば

時々はたよりりりり

時々 御たより

給はり度候

又一つはかよひせじとん

又一つ御身に御無心

申上度

近頃御とりなされし

写真

お頃いともなまぬ

御座候得は

一枚給はるまじく哉

一枚給はるまじく哉

秋の夕

いづれ又々
皆様にもよろしく

着京御報迄

かしこ

九月

七日

春夢子様

願上度事(候?)

いづれ又々

皆様にもよろしく

着京御報迄 かしこ

重

九月

七日

春夢子様

此度は九州方へ

渡遊いたし

あゝの景色など見物

国々の景色など

見物いたし

候得共

名勝は殊更

名勝は殊更

ひとり

見るがをしき心地

見るがをしき心地

いたされ

申候

藝州宮嶋など御身

藝州宮嶋など御身

ともろともにおもひなほ

いかばかり

うれしからんと

物につけ

事にふれ

御身の事思ひ

いでられて

こひしき人は

矢

張 こひしく候

いつ(の日)御逢

ひ申事が出来候哉

学位

い舞祿もたがひ
うけ
てたのしむ心
り生となふ

うけ

も舞祿も ただひとり
うけ

てたのしむ心は

御座なく候

物思ふ軒もの桐

重

物思ふ軒はの桐に

おとつれて

おとつれて
おとつれて
おとつれて

秋立ちそめぬ

浅茅生の
やと

浅茅生の

やと

「九州漫筆」によると、遣遥は七月宇和島に帰り、八月初旬、従弟をつれて、宇和島を船で出発、別府に上り、中津から耶馬溪を経て長崎の柳川にゆき、熊本、佐賀、博多、門司をまわり、別府からまた船で宇和島に返り、

「藝州宮嶋」には触れていない。けれども龍口了信の「哭遣遥中野君」（『遣遥遺稿』外編・雜録）に、

客歳七月、君卒業して親を宇和島に省す。余も亦た尾して西し、京都に相会はんと約し、而も遂に果たさざる也。越えて九月、偶然来つて余を広島の僑居に叩す。余、時に病褥に在り。その奄然たるを聞き、欣騰して起坐し、乃ち青眼に相對し、談笑徹曉。既にして君去りて東京に赴く。

というので、宇和島から上京の途次に広島にゆき、龍口が病中なので、宮島はひとりで見たのであろう。また七月帰省の際、龍口との約束で京都に立ち寄ったが、龍口には会えず（あるいは会わず）、当時そこにいた春夢の兄の坪井春児に出会い、女史の消息を聞いたろうことが察せられる。それが九月に東京に着いて、すぐこの手紙を書いたことに繋がるのであろう。

九州での諸作には、恋慕の情がいちじるしい。

春風四月上毛の游、未だ膏肓の病を治する能はず。炎天八月九州の行、徒に暗涙の紅巾に上るを見る也。齒益ます長じて而して情益ます痴。游愈いよ闌にして而して思愈いよ切なり。

吾は却て上毛館林の華ならず野ならざるの俗を慕ふ。俗已に然り、況んや人をや。

沈沈として情海の波に感じ、滴滴として双袖の沾ふを禁ぜざるは、江湖天涯、それ果して誰を思ふの涙ぞや。

我が思ふ所いづこの辺なる。帝城首を回せば路三千。

これらの言々句々は、いずれも慕情のほとばしって結晶したものである。しかし思慕の対象は南条貞子であつて、春夢女史ではない。この「思慕の情」と、手紙にいう「こひし」さとは、矛盾するのか、しないのか。矛盾するとすれば、「思慕の情」と「こひし」さのいずれが真実でいずれが虚偽か。矛盾しないとしても、それではこの二つはどのように関りあうことによつて矛盾を超えているのか。

昔仲尼春秋を刪り、遂に筆を獲麟に絶つ。その志亦た哀むべし。逍遙子感惻して、游に泣くこと三回。上州に、豆州に、九州に。而して悲鳴の稿、当に此の篇に終るべし。然り而して涙華の漣々たる、猶ほ旧の如きもの、他年化して雲とならんか、雨とならんか、以て世を救はんか、以て俗を乱さんか。その沈鬱抑悲の氣、百年の間に雷発霆裂するの日は、則ち逍遙子の九地の下に朗呼大笑するの時なり。

「九州漫筆」のこの結びの句は、「涙華漣々」とはいつているが、しかし「悲鳴の稿」は「此の篇に終るべし」ともいい、南条氏への狂おしい思慕がすでに沈下して諦観に向かいつつあることを、逍遙みずから感じてゐる。意識と理性が防御を断念したそのような不安定な情緒に、不意に流れ込むのが、無意識の深部に押し込めてあつた春夢女史への愛情だったのかもしれない。

一月三十日、田中みどりさんから二十八日付の手紙をいただいた。春夢女史の、写真二葉、小説『誰が罪』の草稿、ならびに中野逍遙の女史宛手紙五通の複写が同封されている。『誰が罪』は、女史が自らをモデルとする藤井倭文子（しずこ）と逍遙をモデルとする岡野一郎との、出会いから一郎の死後までを、十回、六十三紙に描く。読むと、いろいろの推測は脇において、まずこの小説を紹介すべきだと思つた。次号からそれを連載する。

歌人・大塚五朗

(一六)

1991.1.25 原田憲雄

芙蓉の花

一九三四年 五朗、三十七歳。京都府立京都第三中学校教諭。京都市上京区等持院中町に居住。

三月、長男朗が京都市立御室小学校を卒業し、四月、京都府立京都第一中学校に入学。

一九三五年 五朗、三十八歳。勤務・住所は前年に同じ。

十二月十九日、二女迪子（みちこ）生れる。

五朗の水甕入社 of 正確な時期はわからないが、この年に入社していたことは間違いない。その地位は準同人とあったところであった。このころの短歌作品の一部が、第二歌集『日蝕の庭』のはじめに採録されている。

歌集『日蝕の庭』は、作品を二分し、昭和十五年以前のもは「湖の白魚」に、昭和十六年以後のものを「日蝕の庭」にまとめ、それぞれの前を中扉で仕切っている。ところがその中扉が、植字の段階で入れ替わったのを当時の編集者であったわたしが見おとしたので、反対になっている。そのことをここに銘記して、この歌集を入手された方々にお詫びしておかなければならない。

さて、「湖の白魚」はまた「芙蓉の花」「嵯峨の竹やぶ」「湖の白魚」「松の花粉」の四つの小題に分けられる。そうして「芙蓉の花」のはじめに収める十数首が、『山原』ののち「水甕作品」以前のものと察せられる。次のものがそれである。

咲き垂りて盛りは長き萩の花けさの時雨にぬれつつぞ咲く

ひねもすを露おきしめる谷の道つくづく聴けば物のひそけき

咲ききりて今か崩れむ蓮の花に昼ふる雨は光りつつ降る

夕まけて物のひそけきこの泉石(しま)に落つる寛(かけひ)の音澄みて来る

山ゆ深くひきて落せる樋(ひ)の水のひそひそとして夕暮れにけり

この泉石(しま)に落せる水はとほしけれど朝はずしき音(ね)に頭(た)ちにけり

長(た)け足りて庭の紫苑はしづかなり咲くべき花を秀(ほ)にはもちつつ

こほろぎのこゑもとのふきのふけふ月夜つづきの庭のしめりに

咲きつぎて日長(けなが)くなりぬ芙蓉花(ふようげ)の先なる花は実となりにつつ

雲低き庭に咲きたる白芙蓉風はそれしとラジオの告ぐる

蕎麦がきを喰ひつつわれやうつなし庇(ひさし)に落つる櫓の実の音

朝霜のおけるさ庭に子ら寄りて櫓の実ひらふ見ればさやけし

花甕にさして閑(しづ)けし梔子(くちなし)の朱(あか)き実を冬の灯(ひ)のもとに見る

さびさびと降りてすぐやむ冬時雨さむけき空のまた見えて来ぬ

からたちの花をこぼして逝く春のかなしき雨はひと日降りけり

植木屋が鳴らす鉄の音きこゆうたた寝あつき昼のくもりに

右の「さびさび」と「からたちの」のあいだにも「水甕作品」四首がはさまり、「植木屋が」のあとにふたたび「水甕作品」がおかれるが、製作時順ではなく、著者の「後記」にいうように「庭前触目的（原文のまま）」なもの、洛中洛外その折々に遊んだ所から得たもの」というような類別による。「水甕」に掲載された作品はおおむね製作時順に発表されているようだから、これからあとは、『水甕』での発表順にしたがって排列する。ただ、わたしの保存する『水甕』の切り抜きは欠号があり、切り抜きにない作品が『日蝕の庭』にあり、『水甕』に出詠して没になったものを数年後にまた出詠して掲載されたらしいものがあり、そのうえ前にも述べたように、先生の歌は属目詠のように見えるものも、長い間に得た印象をこめたものが多いので、製作時を厳密に決定したい。だから、ここでの排列も便宜的なものにすぎない。

一九三六年 五朗、三十九歳。勤務先、住所、前年に同じ。松子、三十八歳。朗、十六歳。喜子、十二歳。樹、八歳。哲、五歳。迪子、二歳。

四月、二男樹、御室小学校に入学。

この年、三月、森田曠平と原田憲雄が京都府立京都第三中学校を卒業。森田は、画家としての修業をはじめ、原田は、四月、龍谷大学予科に入学した。この前後に、森田が原田を伴ない五朗を訪れ、短歌について教え乞うた。ふたりは五朗の勧めに従って水甕社に入り、『水甕』に投稿しはじめる。

当時、詠草は月々二十首以内で、三月に送稿すると五月号にその何首かが印刷された。同人・準同人は選者名は記されないが、それ以下は記してある。結社によっては会員のほうで選者を選びえたようだが、水甕社では社

のほうで決めた。このとし五月号の五朗の作品。

節分といふに何十年來の大雪來る

大雪をすつほり被(かむ)りて音もなし撓(しな)ひゆたけき眞藪の竹

夕日光(ゆふひかげ)深く雪野に傾きて氣ぜはしきかもよ鶉鳥(ひよどり)の聲 (庭三)

温く一日晴れたり夕部屋に雪解の庭の土にまひ來る(「まひ來る」ものが何かわかりにくいが原文のまま)

物青く鹿がねてゐる山かけは(に)雪さへさびしはだらはだらに 二月の奈良にて (庭望)

()内は、作者が自らつけたルビ。へ内は、原田のつけた注釈や振り仮名で、誤りがあるかもしれない。

(庭三)は『日蝕の庭』の一二頁に同じ歌が収められていることを示す。「ねてゐる」は『日蝕の庭』では「ねている」とするが、これはたぶん原田の校正ミスであろう。「二月の奈良にて」は『日蝕の庭』では「奈良」とする。これらの異同は、特に重要と思われるもののほかは注しないが、表記法はほぼ『日蝕の庭』に従う。

次は六月号。

客を案内して歩くことありて

足利の大臣(おとど)も見けん衣笠の山の松山今日雪つめり

清水の古き御寺(みでら)の朝寒く人も稀なり松風の音

かすみつつ連なる山は如月の雲を残して空にまぶしき

庭苔の色も青みて昨日今日さす陽の光(かげ?)の色定まりぬ

吹き荒れし季節の風も定りて咲くはしづけき山吹の花 (庭三)

朝ぐもりややに晴れゆく春空に咲てきてまぶしき木連の花

ほのかなる月さへありて春の日も夕暮近き水浅黄空へみづあさぎぞら

この泉石(しま)に一本(ひともと)咲きてあはれなり昼をしづけく散る山桜 (庭三七)

夕風はあるとしなけれ咲く花のゆたにしづかにゆれつつぞゐる (庭三七)

日にかすむ山のまぶしさ幾日の雨かもやみて朝よりの晴

七月号。

しめやかに雨降る山を登り来てひえびえ匂ふ若葉に対ふ (庭四) (『日蝕の庭』での題は「笠置四首」)

谷深く流れ入りつつ木津川の瀬の音へとはひびく木々の梢に (〃)

見おろせば笠置の山の谷深く若葉ごもりに瀬の音ひびけり

まな下の笠置の駅に汽車とまりやがて出でゆく雨にぬれながら (〃)

山を降りて濡れたる着物ほしながら見るに寂しも木々の緑は (〃)

春昼(しゅんちゅう)の光とろとろさしてゐつ散るはしづけき山桜の花

おのづから心安らぎしばらくは屋山桜ちるを見てゐし (庭三七)

若葉の樹楓は楓榭は榭夜風にさやぐ音はまぎれず

夕冴ゆるそらに聳えて楓の木若葉の枝のたしかなる張り

おさへ難き怒りに妻をうちしかどうつ手の下ゆ悔心わく

おのづから怒りは去りてこの我の騒(さわ)だち易き性(さが)をあはれむ

思はざるに石井先生の御逝去にあいて(「あいて」原文のまま)

一度(ひとたび)は行きてまみえん願もちてありへしわれや遂に空しき

「石井先生」は、石井直三郎(一八六一—一九三六)、八高教授、国文学者、『水麴』の編集者。
八月号。

石井先生追悼会席上

孤雁院直樹徹道居士の御位牌に若葉の光かがよひにけり

この泉石(ししま)の松ものふりて吹く風の音こまやかに夕づきにけり

人にいふさびしさならぬ夜を深く榭の古葉の散るを聞きつつ

人にいふさびしさならぬ夜を深く春の落葉の散るを聴(き)きあつ (庭三)

山深く咲きてにほへる春蘭のすがしき花を掘りてかへりぬ

長雨の今朝は霽れつつ比叡(ひえ)が嶺(ね)の夏山となりて姿(なり)のしづけさ

雨はれてさす陽もうすき松山の夕ひとときを鳴ける春蟬

愛宕嶺に片居る雲はしづかなり降る程もなくはれし夕雨

愛宕嶺に片のる雲はしづかなり降るほどはなくてはれし夕雨 (庭三)

竹やぶの竹はぬれつつそよぐなり雨霽れ空ゆ風吹き下る

或折に

いはんとして言ひ出しがたきさびしさは松の花粉の散るをみてるき (庭五)

九月号。

金鈴峽

谷深く入りても来つつここかしこ鳴ける河鹿を夕べ愛(を)しめり

谷間(たにあひ?)に道は入りつつほそぼそしみぎりひだりの野茨の花

暮れ入りてなほも明るき夏空を仰ぐにかなし谷深く来ぬ

比叡山青龍寺

さわさわと風たちそめし夕山にひそかに鳥は谷うつり鳴く (庭二六)

ひそけさや杉の葉に湧く夕霧のすでにかすかにしづくしそめたる (〳) (風土六)

二声(ふたこゑ)はたしかに聴きし筒鳥の三声と鳴かず夕深き谷 (〵) (風土七)

夕おそく着きたる寺の安らけさ汗あえしシャツを先づぬぎにけり (風土七六)

谿深く湧きて流るる夕霧の嗅げば親しも杉の香ぞする

比叡山の夏あはれなり時じくも峯ゆく雲は雨をこぼせり (風土七)

夜を深く地震(なる)ゆりすぎぬ辛うじて保(も)ち来し空の明日か崩れむ

夏山のあかとき寒し谷深く杉は霽をこぼしそめたる

あかときをすでに目覚めて鳴ける鳥みねに谷間にこゑのすがしき

(庭三九) (風土八三)

この号の月評に日比野友子が次のようにいう。

大塚五朗氏 月々相当の歌数を発表されてゐる。その歌は東洋趣味に立脚し、定型の美しいリズムに乗り切つて作られる(への)であらう。

長雨の今朝は霽れつつ比叡が嶺の夏山となりし姿のしづけさ

別に氏の個性といふ程のものが歌を調子づけてゐるといふわけでもないが、快い印象を与へられるのは作者の歌心の豊かさであらう。

なお、『京都風土記』の「比叡山の夜」はこれらの歌の作られた時の模様をえがいている。すこし節録する。

初夏も五月頃になると、或は南から或は北から四十何種の渡り鳥が、この比叡山の深い杉の木立を慕うて集るのだ。それから九月の末頃までは、事実比叡は、それ等小鳥の声で包まれ、小鳥のこゑにゆり動かされるといつてよい位である。時鳥、筒鳥、三光鳥、やぶさめ、山椒喰ひ……。私は筒鳥が聴きたかつたのである。

雨雲の谷より湧くや時を經ず音あらしき雨は峰ゆ降り来ぬ (庭三九)

午後から曇つてどうやら山は雨になりさうな空模様を気づかひながら、五六人の同僚と、或者はビールを、或者は菓子や、或者は果物をそれぞれ思ひ思ひに用意して山の寺に一夜の宿りを求めて出掛けたのである。

…私達の行かうとするのは北谷深くただ一つ取残されたやうに建つてゐる元黒谷青龍寺といふ山坊なのであ

る。：道をはさんで立つ木々の梢にゐて夕一時をしきりに啼き騒ぐ名もわからない鳥鳥の声、それも次第に静まつて、遠くから流れるやうに時々降つて来る雨をわびしみながら、足を早めた私達の耳に思ひがけなくも筒鳥の声が聞こえたのである。：

十月号。出詠がなかったのか、この号をわたしが保存してなかったのか、切り抜きがない。『日蝕の庭』に、

葦ごもり鳴く行々子（よしきり）のこゑ暑し降らんとしつ降らぬ夕立（淀川二首）（庭五）

対岸（たいがん）の青葦むらのひとところ光りなびかひ雨渡る見ゆ

があり、他のどこにも見えない。たぶんこのころの作であろう。

十一月号。

今年はずの外に残暑酷（きび）しかりしかば

衰へぬ真日の暑さにうち萎へなへて風にも音をたてぬ庭樹々

かうかうと風にし靡く夏草の緑は深し山は曇りぬ

樹々が落す翳（かげ）のこまかさこの泉石（しま）の石しろじろと秋づきにけり

今日は稀に心寛ぎ見てありぬ屋根の上なる青空の色

芙蓉花（ふようげ）も咲くべくなりて昨日今日颯風曇りの空重々し

9-37. あなたはこれを説いてはならぬ、頭の固い者、うぬぼれや、正しく修行しない者たちに。

愚か者は、愛欲にふけり、無知だから、説かれた法をののしるだろう。(111)

仏の眼としてつねに世界に確立する、わたしの巧みな方便を、謗(そし)り、

眉をしかめて、仏乗を捨てて。この連中の受ける、きびしい果報を聞け。(112)

わたしの在世であろうとも、すでに涅槃の後にせよ、このような經典を謗ったり、

ビクたちを無力にさせる者がいるなら、かれらが受ける結果を、わたしから聞け。(113)

かれらが人間世界から落ちて、一カルバが満ちるまでの住所はアビ地獄、

さらに多くのアンタラカルバの間、そこへ落ちては落ちるのだ、愚かな者らは。(114)

地獄からさらに墮落し、かれらはそれから、畜生道をさまよい歩き、

瘦せさらぼうた犬になり、狐になり、他のものどもにもてあそばされる。(115)

そのときかれらは色くろずみ斑らになって、肌腐り、かさぶたができ、

いよいよ毛はぬけ、ますます瘦せこける、わたしの無上道を憎悪しながら。(116)

衆生のなかで常に警戒の眼で見られ、石を投げられ、ぶたれて、泣きわめき、

あちらこちらで棒で脅され、飢えと渇えに苦しんで、手も足もひからびる。(117)

それからさらにラクダになりロバになり、重荷を運び、鞭や棒でたたかれて、

食べ物の傾いに悩まされる、仏の眼を誘る、愚かな心の持ち主は。(118)

さらにまた愚かな者らは、いやらしい狐となり、片目で、片足、

やっつけられる、村の子どもに石をなげられ、叩かれて。(119)

それから死んで、愚かな者らは、五十ヨージャナもあろうという、

長い体の動物となり、のろのろ、ぐずぐず、のたうちまわる。(120)

足なしの、腹で這いずるものとなり、幾千万という多数の生き物に喰いかじられ、

ぞっとするほどおそろしい苦しみを受ける、このような経典を誘ったために。(121)

人間の体をとりもどしても、手はまがり、足はびっこで、

背には瘤、目はすがめ、愚鈍でいやしい、わたしのこの経典を信ぜぬかれらは。(122)

世間では信用されず、その口からはくさい臭いがぶんぶんし、

その体には夜叉や悪魔がのりうつる、仏の覚りを信ぜぬ者らは。(123)

いつも貧乏で、やせこけて、日やとい仕事にこきつかわれ、

かれらには悩みがおおく、寄るべないまま世渡りをする。(124)

たまたま雇ってくれたところで、支払うものもくれようとせず、

与えられてもたちまちに消えうせる、これこそ悪業の果報というもの。(125)

ma ca va lvaṃ sambahiṣu ma ca maṇiṣu ma yukta-yogina vadasi etat /

bālā hi kāmēsu sada pramatlā ajānakā dharmo ksipeyu dhāṣitam //111//
 upāya-kausalāya ksipitva mahyam yā buddha-netri sada loki samsthitā /
 dhṛkṣiṃ karivāna ksipitva yānaṃ vipāku tasyeha śrṇohi tīvram //112//
 ksipitva sūtram idam eva-rūpaṃ mayi tiṣṭhamāne parinirvṛte vā /
 dhikṣusu yā teṣu khilāni kṛtvā teṣāṃ vipākam mamiham (W:mayiham) śrṇohi //113//
 cyutvā manusyēsu avici teṣāṃ praliṣṭha dhōtī paripūrṇa-kalpān (W:kalpāt) /
 lataś ca dhūyo ntara-kaipa nekāṃś cyutāś ca tatra prapatantī (cyutāś-cyuās tatra patantī) bālāḥ
 // 114//
 yadā ca narakeṣu cyutā bhavanti lataś ca tiryakṣu vrajanti bhūyah /
 sudurbalāḥ śvāna-śrṣāla-dhūtāḥ pareṣa (W:pareṣu) kṛṭṭāpanakā bhavanti //115//
 varṇena te kālaka tatra dhonti kalmāśakā vrāṇika kapḍulāś ca /
 nīlomakā durbala dhonti bhūyo vidvegamāṇā mama agrā-bodhim //116//
 juṅpsitā prāṇiṣu nitya dhonti loṣṭa-prahārābhihātā rudantāḥ /
 dardēsu (W:dardēna) samtrāsita tatra-tatra kṣdhā-pipāśa-hata śuśka-gātrāḥ //117//
 ustrā 'the vā gardabha dhonti bhūyo dhāram vahantāḥ kaśa-danḍa-tāḍitāḥ /
 āhāra cinlam ancinatayanto ye buddha-netri ksipi bālā-buddhayaḥ //118//

punas ca te krostuka dhonti tatra dīhatsakāḥ kāṇaku kaṇṭhas (W: kuṇṭhas) ca /
 utpīḍitā grāma-kumārakehi losṭa-prahārābhīhataś ca bālāḥ //119//
 tatas cyavitvāna ca dhūyu bālāḥ pañcāsātinām sama yojanānām /
 dīrśh ātmabhāvā ni bhavanti prāṇino jagās ca mūḍhāḥ parivartamānāḥ //120//
 apādaka dhonti ca koda-sakkino vīkṣadyamānā bahu-prāṇi-kotiḥḥ /
 sudarunām te anubhonti vedanām kṣipitva sūtram idam eva-rūpam //121//
 purne ātmabhāvam ca yadā labhante te kuṇḍaka jaṅgaka dhonti tatra /
 kūbjā 'tha kāṇa ca jadā jaghanyaśśraddadhantā ima sūtra mahyam //122//
 apralyaniyās ca bhavanti loke pūti mukhā tlega (W: tega) pravāti gandhah /
 yakṣa-grāho ukraṇi teṣa kaye śśraddadhantan ima buddha-bodhim //123//
 daridraka prasana-kāraś ca upasthāyaka nitya parasya durbalāḥ /
 ābādha teṣām bahukās ca dhonti anātha-dhūtā viharanti loke //124//
 yasyeviva te tatra karonti sevanaṁ adatu-kāmo bhavati sa teṣām /
 dattam pi co naśyati kṣipram eva phalam hi papasya im eva-rūpam //125//

正しい仏の教えを捨て去り誇る者が受けるべき果報、としてここに描かれるものすべては、あの譬喩の、老朽して燃える家のなかに見られたすべてのものである。戦争が照らしたす今の世界となんと似ていることだろう。